



園だより

18. 2月号

「知る」ことより大事

このタイトルに「あれ？」と思われた方もいらっしゃるのでは……。先日の保護者会では「知る」ということをテーマにお話をさせていただきました。

私たちが時間とお金と労力と、なんと言ってもとびきりの愛情を注いで日々奮闘している子育て。しかしこの子育ての先に、子どもたちの幸せな未来が保障されていなかったら、私たちの頑張りは報われない。子どもたちが成長した先の未来を保障することも私たちの大きな責任。そのために、私たちのまわりで起こっていることを私たちが「知る」こと、そして考えることが大事ではないか。

そんな話でした。ところが、その後に私の愛読書「センス・オブ・ワンダー」(レイチェル・カーソン作・上遠恵子 訳)を久しぶりに読む機会がありまして、するとそこにはなんと、こんなふうにかかれていたのです。

(この前後にも大切な言葉が書かれているのですが、紙面の都合で少し強引に切り取ります。) わたしは、子どもにとっても、どのように子どもを教育すべきか頭をなやませている親にとっても、「知る」ことは「感じる」ことの半分も重要ではないと固く信じています。 子どもたちがである事実のひとつひとつが、やがて知識や知恵を生みだす種子だとしたら、さまざまな情緒やゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。

そうでした！これも忘れちゃいけないことでした。もちろん、私の保護者会の話とはテーマが異なっていますが、やはり、子どもの育ちを考える時に「感じる」ことは重要です。レイチェル・カーソンは子どもたちには生まれつき「センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性」がそなわっていると書いています。

例えば、つい先日の真っ白な朝の子どもたちの姿に、私たちはこのことを見ることが出来ます。登園してくる子どもたちの表情が、普段の何倍にも輝いて笑顔でした。もう何だかよくわからないけれど、口元が緩んでしまって、何もなくても満面の笑みです。そしてどの子どもどの子も、これ以上嬉しいことはない、といった表情でやってくるのです。寄り道で30分、1時間いつもより遅くなった子もいました。間もなく園庭では、キラキラ光りながらふわっと広がってはなくなる雪合戦が始まり、雪玉をころころ転がして大きな雪玉を作り、それを重ねてゆきだるまを作る子どもたちが現れ、斜面を滑る面白さを見つける子どもが現れ、子どもたちはそれぞれに楽しいこと面白いことを見つけ、夢中になっていました。

大人はいつの間にか忘れてしまっています。雪が降り積もった朝の静寂と息をのむ美しさ、足跡のない雪面に足を踏み入れていく申し訳なさどワクワク感、いつもは残されていない猫の足跡・鳥の足跡、積った雪の深さが想像を超えていた時の驚き、触れる雪の冷たさ・硬さ・柔らかさ、滑る雪のおもしろさ・怖さ、固まる雪、シャーバットになりやがて溶けてゆく雪の不思議。こんなたくさんの美しさや面白さに、子どもたちの心は動いています。たった一晚の雪に子どもたちはたくさんのことを「感じて」います。目には見えない大切なところが豊かに育っていきます。人生を支える根が伸び張られていきます。レイチェル・カーソンはこの著書の終盤でこう述べています。

この感性をはぐくみ強めていく子ども時代を過ごした人は(※前の文章をこの後に繋がるようにまとめています)、人生に飽きて疲れ、孤独にさいなまれることはけっしてないでしょう。たとえ生活の中で苦しみや心配ごとなどであったとしても、かならずや、内面的な満足感と、生きていることへの新たなよろこびへ通ずる小道を見つけたことができると信じます。

そういえば、雪の日の子どもたちとやってきた大人たちもまた、なんだか嬉しそうでした。そんな大人たちの「センス・オブ・ワンダー」があつてこそ、育まれる感性でもあります。